

理事長就任にあたって

日本現代中国学会理事長 坂元ひろ子

(一橋大学大学院社会学研究科)

このたび、思いがけなく本学会理事長に選出され、不惑の年はいつの間にか、とうに過ぎてはおりますものの、さすがに当惑を禁じ得ません。のちの回顧において毀貶が加えられるやも知れませんが、みなさまのご協力で、なんとか任期をのりきりたいと思います。どうかよろしくお願ひいたします。

本学会は会員数ではかつてより盛況となっていますものの、その内実が問われはじめているのも事実です。

構想力をもった自律的な改編の時期にさしかかっているというべきかもしません。関西・西日本でのこのところの動きの活発化は、その機運を示しているとみなしうるでしょう。東京、東京大学におかれ続けてきた事務局体制も、再検討すべき時期だという声もあがってきました。今後はこうしたことを課題化して進むことになるでしょう。私の任期内では、改編への方向性の議論を積み重ねていくのがせいぜいのところかもしませんが、みなさまの声をお聞かせいただきたいと思います。

学会の改編といった問題は、日中、さらに世界の動向ともリンクしています。中国と日本の状況を考えますと、今年は日中國交正常化30周年にあたり、しかも中国では江沢民体制から胡錦濤体制へとスイッチされたという意味では、新世紀の大きな節目ともなるべき年であったといえるでしょう。

かたや、日中問題を考えるのにも目中に注目するだけではすまない、ということも明らかとなってきています。歴史認識問題もアジア規模に開いていくことが解決をはかるうえで必要になるでしょう。そして、いうまでもなくグローバル化のなかで昨年、アメリカで9・11事件が起り、その後、アメリカ主導による戦争が、日本ばかりか中国をも巻き込む様相を呈してきています。20世紀は戦争の世紀といわれましたが、形を変えた戦争の世紀を重ねかねない、と危惧されます。まして、アジアにエネルギーッシュな発展をみせる国々がある一方、たとえば朝鮮民主主義人民共和国は国内外で厳しい環境におかれ、それを認識する日本の知的な貧弱さなどを考慮しますと、なおさら暗雲がみえてきます。

こう考えますと、日本現代中国学会とはいえ、中国だけでなく、より広いアジアー決して自明ではなく、むしろ未来形のーーにも開かれていく方向を模索し、諸国間の非対称性を認めたうえでの相互批評空間的な方向をめざし、知的資源を創出していくべきではないでしょうか。就任に当たって、みなさまに問い合わせさせていただきたいと思います。